

稱讚 二二九号

二〇二二年三月一日発行

前に生まれんものは

後を導き、

後に生まれんひとは

前を訪へ

連続意窮にして

願はくは

休止せざらしめんと思ふ

意辺の生死海を

尽くさんが為の故なり

教行信証 〔化巻〕より

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com



COVID19の禍中、

緊急事態宣言中

お見舞い申しあげます。

春のお彼岸が近づいて参りました。昨年は、COVID19の感染症が流行りだし、オリンピック・パラリンピック2020が一年延期が確定しました。そのころ日本全国では、感染は二桁台で、東京は一桁でした。春のお彼岸を過ぎてから感染が急速に増え、学校も休校、初めての緊急事態宣言が発出され、誰もが行動を自粛しましたが、解除後、夏にはウイルスは弱まると予想していましたが、第二波が襲いました。それでも感染は、数字上は、一日全国千人規模で、徐々に減り、一日五百人程度の感染が続きました。冬が到来すると、第三波が凄い勢いでぶり返し、アメリカ大統領選挙を気にしている間に、感染症は増え続け、今年二月七日から二回目の緊急事態宣言が発出されました。

今の時点で、首都圏の一都三県の解除は延期されるようですが、感染は減ってきているとは言え、昨年と同じ時期を比べると、一桁以上の違いがあり、予断は許されない状況であります。

東京五輪2020は、復興を掲げたものでありました。今年は、東日本大震災発生から十年を迎えます。

お恥ずかしいことに、もう十年なのかと思うだけで、この十年、被災された方々を思い続けてきたかと問われると、COVID19のように、その場、その時、自分の周りのこと、自分中心の営みしかしてこなかった私です。知り合いの僧侶の方の中には、今も東北の復興の支援を続けておられる方も、熊本などの支援も行っておられる方がいらっしゃるというのに、それを知りながら手伝うこともせず、東京五輪は中止かなあと、無責任なことを呟くばかりです。

この度の春のお彼岸でも、ただ門信徒の方々がお集まりいただけるだろうか、きっと、いかは以前のように、少々の密はあっても、大して気にもしない時が来ると思い込んでいる節が私の中にあるのかもしれない。

この頃、本当は前からの風潮ではあるのでしょうが、最近、イノベーション(改革)するにおいて、ダイバーシティ(多様性)ということが重要視されております。

イノベーションということだけでしたら、実は三十年ほど前、本願寺では、蓮如上人五百回遠忌法要」が百日間厳修されました。その時のテーマの一つに「イノベーション」がやって来た」というものでした。門信徒・僧侶の体質や宗門のあり方、道のあり方を、浄土真宗では「中興の祖」として敬って参りました蓮如上人に学んでいくというものでした。

また、二〇一一年四月より「親鸞聖人七百五十年大遠忌法要」が六十五日間百十五座厳修されました。奇しくも、ある意味、お祝いムードであったこの法要が始まる一月前、今年の三月十一日、十年を迎えます東日本大震災が発生しました。法要は自粛した方がよいのではないかとのご意見も多くありました。

この大遠忌法要は、親鸞聖人のお言葉である「世のなか安穏なれ」がテーマでもあり、正にこの震災時において、平穩を願わずにはおれなかったことでしょう。現に被災された方もご本山にご参集なされ、ご法要を続けてほしいと仰ったことでもありました。

法要の御満座にあたり、当時のご門主さま(即如門主)が「新たな始まり」ということで、ご消息を述べられました。親鸞聖人のお念仏の教えは、日本仏教だけでは

なく、日本の社会への一つの変革でもあったと思えます。爾来、「浄土真宗」という教えは、常に人びとの心に阿弥陀さまのご本願を伝えようとされたのだと思えますが、蓮如上人がご門主になられるまでは、本願寺は淋しいもので、聖道の教えこそ、僧侶の道であり、在家の人は、その僧侶に従っておけば良いのだという考えが当然のようにはびこっていたのでしよう。

そこに蓮如上人は、本当に救われる道を、わかりやすく人びとに伝えていかれ、ご門徒が増え、在家仏教の中心となっていくのだと思われ、封建制度の中では、やはり権威には対立しきれなかったというよりも、内部でも権威が横行していたのでしよう。それでも、真摯に浄土真宗の教義を研鑽してこられた方もおり、明治になり、学問的な改革がなされました。今も伝統宗学・現代教学と分かれるところですが、どちらが正しいとは言えないところもあるかなと思います。

戦中は、戦時教学として、戦後、批判的になつておりますが、戦中、軍がお寺の鐘などを押収するのを、僧侶・門徒が必死に止めようとしたのも事実です。

そして、戦後も「形ばかりの僧侶・名ばかりの門徒」と内省し、同朋運動・門信徒会運動を柱に、世の中において差別被差別からの解放をめざし、教化の充実のため、仏教婦人会など教化組織づくりに励みました。その二本柱が宗門の基幹となり、五十年ほど続きました。

現在、御同朋の社会をめざす運動(実践運動)として引き継がれております。本願寺も常にイノベーションを図ってはいるのですが、この私自身に胸を当てると、心許ないところがあります。

ご門主も即如門主からご子息の専如門主に継承

され、二〇二三年には、親鸞聖人八百五十年御誕生・立教開宗八百年」の慶讃法要を迎えます。いよいよ準備に入っているところに、COVID-19の感染に見舞われ、一寺院としても、さらに変革の必要性が高まったことであります。

今、変革(改革)には、多様性が求められると言われます。特に社会の中で、会社の中で、多様性を持つことが、革新を生むのでしよう。

森・元首相の発言は、ただ五輪委員会の会長を女性にすれば済む問題ではなかったのですね。

世界に目を向けると、人種差別は根強くありますが、事に多様性のことになると、進んでおり、男性だから、女性だから、LDGBだからで、評価、偏見を持たないことが当然の社会に成りつつあり、日本は、もっとも遅れていると視られているようです。

でも、「多様性」と言う言葉をよく理解しないまま、何でもかんでも「多様性」が大切だと言うことにはならないと思います。思想、宗教の違いを認め合い、共存し、共働し、共創していくことは、大事なことだと思いますが、時に「救いの物語の多様性」となると、??で、私自身、浄土真宗が「宗教」という枠でしか語りきれないものか、しさを感ずることがあります。自分がどこまで、親鸞聖人の教えを理解しているか疑うところではあります。阿弥陀さまのご本願は「普遍」であるはずなのに、手前味噌な考えにすぎないのでしょうか。親鸞聖人も蓮如上人も「お他宗の批判はしないよう」。浄土真宗のご信心のありようをお他宗の方に強要しないように」と仰ってください。おられますが、こんな私の世界、私たちの世界だからこそ、阿弥陀さまは「生死の苦海を尽くさするための故なり」と、南無阿弥陀仏のお念仏を届けてくださっておられるのです。合掌

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

親鸞の手紙

浅井 成海 氏

念仏ひろまれかし

これだけ徹底して如来にはからわれ、如来に生かされることを説きつつ、それがひたすら仏の智慧を受けることだと説く。ではその智慧を受け入れる念仏者の生き方は、どのような積極性をみることができるのであるだろうか。

親鸞三十五歳、承元元（二二〇七）年の念仏停止令により、越後流罪となった。また親鸞が関東で生活のおり、嘉禄三（二二二七）年の念仏弾圧（嘉禄の法難）が生じ、兄弟子の隆寛が流罪となり相模の飯山で寂している。

親鸞の手紙によれば、関東の門弟の人びとに再び念仏弾圧に等しい事実が生じてきていることが知られる。

その全体を明確に把握することはできないがそれらの事実に対して、念仏者としてどのような対応すべきかが示されている、御消息の第十七通、第二十五通、第二十七通、第四十三通を通してつぎのような点を指摘することができる。

（一）関東にさまざまな異義が生じたために、これを正すために、京都より関東へ行った息男の慈信房善鸞が、念仏の人びとを鎌倉幕府に訴

えたという事実が生じた。権力をもった人びとを縁として念仏をひろめよということを善鸞が主張したそうであるが、そのようなことがあってはならない。また京都よりそのようなことを指示したことはまったくなく強く否定している（第十七通）。

（二）鎌倉幕府で取り調べを受けたのは、入信房、性信房などであった。とくに性信房の申し開きによって誤解が解かれたことを喜んで、なによりも往生決定のために念仏申し、さらに公けのため、国民のため念仏を申すべきことをすすめる。有名な「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」とお念仏申すべきことが強調される帰するところ御報恩のお念仏であるとも述べている（第二十五通）。

（三）これらの手紙を通して、もし権力による念仏者に対しての迫害や批判がつづいて、その場に居づらければ、その場の縁が尽きたのだと思いつくべきでない。余のひとびとを縁として、念仏をひろめんと、はからひあはせたまふこと、ゆめゆめあるべからず候ふ。そのところに念仏のひろまり候はんことも、仏天の御はからひにて候ふべし。世間の人びとに取り入って念仏の教えを広めようと企てるようなことは決してあってはなりません。その土地に念仏の教えが広まることも、すべて仏のはたらきによるのです。（第十七通）と述べている。

余のひとびとを在地の権力をさすとの見方もある。その土地に力をもつ権威に従って念仏をひろめてはならぬ、と誠められるのである。さらに具体的には念仏のひろまることを妨害する領家（荘園領主）、地頭、名主の人びとに對してもあわれみをなして、念仏を申し、いず

れは念仏申す身となつてほしい、念仏ひろまれ」と述べるのである。幾度もの念仏の弾圧や批判に對するきびしい視点をもちつつ、権力に對する姿勢に柔軟な対応が語られている。

承元の念仏停止」を語る「他巻」後序の文は衆知の如く「主上臣下」に對するきびしい批判の文となつており、生涯その視点をもちつつけたが、晩年の手紙においては、念仏を申し念仏ひろまれ」の視点に立つて、すべての人が念仏の法に遇うことを願っている。

もちろん、同行の友人に對する姿勢は、同行同朋の視点であるから、有阿弥陀仏への手紙には「この身は、いまはとときはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまぬらせ候ふべし」

わたしは今ももうすつかり年老いてしまひ、きつたあなたより先に往生するでしょうから、浄土で必ずあなたをお待ちしております。第二十六通」と述べている。

悪に甘えてはいけない

親鸞の手紙でどうしても注目しておかねばならぬ問題がある。親鸞が説いてきた「極重悪人」の救い、「罪業深重」の救いについて、関東の人びとのなかに誤れる主張が生じ、どのような悪業を重ねた者であっても、どのような悪業をなすついででも救われると説く、いわゆる「増悪無碍」の誤れる主張に對し、きびしい批判があることに注目しておかねばならぬ。手紙の第二通、第四通、第五通、第二十七通、第二十八通、第三十七通におよんで、決して、悪に甘えてどのような悪をも許していく教えではな

毎月 親鸞聖人を知ろう」を掲載します

親鸞聖人が生きた時代の社会のあり方などを通して親鸞聖人の生涯を訪ね少しでもそのご遺徳を感じたらと思ひます

いことをあきらかにしている。まず、どのような誤った主張をなしたかについてつぎのように述べている。

師をそしり、善知識をかるしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふよしきき候ふこそ」 師を誇り、善知識を軽んじ、念仏の仲間でもお互いにおとしめあつたりしておられると聴きます。第二通)

われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをいひなどすることはあるべくも候はず」 自分は往生できるはずだからといって、してはならないことをし、思ってはならないことを思い、いってはならないことをいうようなことがあつてはなりません。第四通)

無明の酒に酔ひたる人によい酔ひをすすめ、三毒をひさしく好みくらふひとによいよ毒をゆるして好めと申しあうて候ふらん、不便のことに候ふ」 無明の酒に酔っている人に、ますます酒を勧め、三毒の煩惱を久しく好んで口にしている人に、ますます毒を飲めとそそのかしあつてはいるようすが、何とも心の痛むことです。第五通)

悪はおもふさまにふるまふべしと仰せられ候ふなるこそ、かへすがへすあるべくも候はず」 悪い行いは心にまかせてするのがよいなどといつておられるようですが、それは決してあつてはなりません。第三十七通)

このように、煩惱のおもむくままにおこない、いかなる悪いところがあつても救われていく教である、本能のままにふるまい、いかな

る悪行のままでも救われる、との誤れる主張である。

これに対して、親鸞が説かれる主張は、
「ま弥陀のちかひをもききはじめておはします身にて候ふなり．．．三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし．．．薬あり、毒を好めと候ふらんことは、あるべくも候はず」 今阿弥陀仏の本願を聞きはじめようになり、阿弥陀仏の薬を常に好むようになつておられるのです．．．薬があるから好きこのんで毒を飲みなさい、というようなことがあつてはならないと思います。第二通)

往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにて候はず．．．ただ願力にまかせてこそおはしますことにて候へ．．．ただこのちかひありときき、南無阿弥陀仏にあひまゐらせたまふこそ、ありがたくめでたく候ふ御果報にては候ふなれ」 往生は凡夫があれこれと思いはかつてできることではありません．．．ただ本願のはたらきにまかせておられるのです．．．ただこの本願があるということを聞き、南無阿弥陀仏にあうことこそ、たぐいまれな尊い果報なのです。第四通)

もとぬすみごころあらん人も、極樂をねがひ念仏を申すほどのことになりなば、もとひがうたるころをもおほひなほしてこそあるべきに．．．この世のわるきをもすて、あさましきことをせざらんこそ、世をいとひ念仏申すことにては候へ」 かつて盗みをはたらこうとした人でも、極樂浄土への往生を願つて念仏するやうにまでなつたなら、もとの誤つた考えもあら

ためもするはずですが．．．この世の悪も捨て、嘆かわしい行いもしないようにしてこそ、この迷いの世界を厭い、念仏するということなのです。第三十七通)

このように手紙のなかで、悪をすすめる煩惱の思うままに悪行を積み、それが本願の救いであると説いた主張を、具体的にそのいちいちについて誤れる見解を示し、ただ本願のはたらきにまかせ、念仏の教えに遇い、極樂を願う身となれば、従来の悪なる思いもとどめ、この迷いの世界を厭い、念仏申す身となることを、積極的に説くのである。臨終まで煩惱の身であることが知らされるからこそ、その身を厭い、本願に従い念仏申す身が煩惱に引きずられるおこないを思いとどまることを、これもわかりやすく見据えて悪をつつしんでいくことが、念仏者の生き方であることと示す。

なお、親鸞の最晩年の手紙は、八十八歳のとき、乗信房に宛てたものである。八十七歳より八十八歳にかけて全国的な飢饉が生じ、念仏者の多くの人びとが亡くなったことを悲しみながら、積尊の説かれる生死無常の法を示して、受け入れていくところに乗り越える道がある。あらゆる原因と条件のさまざまに関わりによって変化の生ずる事実を見極め」と説き、平生に信心のひととなつてはいる人びとは、臨終の善悪はいつさいいわないと述べる。帰するところ、

故法然聖人のおおせとして、浄土宗の人は愚者になりて往生す」と語る愚者とは、人間の本来もつ自己中心性、深い闇をさすものであり、善導、法然と継承されてきた機の深信が、法の

の深信によってあきらかになり、本願力による救いを最晩年の手紙で示すのである。

むすび

その他善鸞事件の問題など言及しなければならぬ問題もあるが、紙数の都合もあり別の機会に譲りたい。いずれにしても親鸞は晩年の手紙のなかで門弟の問いに答えつつ、他力の本願に生きるということは、ひたすら本願を信じ念仏申して生きることである。この凡夫のわたしが現実の苦悩から解放され、浄土に往生していく

※前号の掲載文を少し書き直し、書き加えてみました。

聖道の慈悲と浄土の慈悲

豊島勝昭先生のお話を聴いて

今年一月九日の「がん患者・家族語らいの会」オンライン講座では、豊島勝昭氏（医師・神奈川県立こども医療センター新生児科部長）に「周産期医療ドラマ『ヨウノドリ』の医療監修で伝えたかったこと・気づいたこと」のご講演を頂きました。

講演の冒頭、「障がい」の定義を問われました。これまで「障がい」の「がい」は「害」では決しない、差別の言葉とならないように「不自由さ」と表現することを学んできましたが、先天性疾患の子どもたちと自分を比べると応えられませんでした。自分が生まれたのは、いろいろな縁があって、

偶々、この自分が誕生したと理解してはいましたが、いろいろな方が関わり、生命を育んでくださったことには気づこうともせず、何不自由なく健康に生まれたと当たり前に思っていた自分があります。豊島先生のお話で「澄いたら死んでしまう赤ちゃん」がおられることを初めて知りました。

医学医療の進歩により、助からない生命が助かるようになり、泣かない赤ちゃんを無理矢理泣かせるのと助かるはずのその生命が逆に危ぶまれるケースを未然に防げるのです。

生命に携わるお医者さんをはじめ、看護師さん、ご家族は、「一瞬一瞬、気を抜かず、真摯に生命に向きあっておられるのですね。」しかし、全てが順調にいくわけではないのです。医療の進歩により、お母さんのお腹の中で生命が誕生した時点で、ダウン症などの疾患があるかが判

るようになりました。それに伴い、医師は親御さんに説明します。生むかの判断は親御さんが決断しなければなりません。最初は、それでも生んで育てていくと決断した親御さんでも、出産が近づくにつれ、悩み苦しむのです。

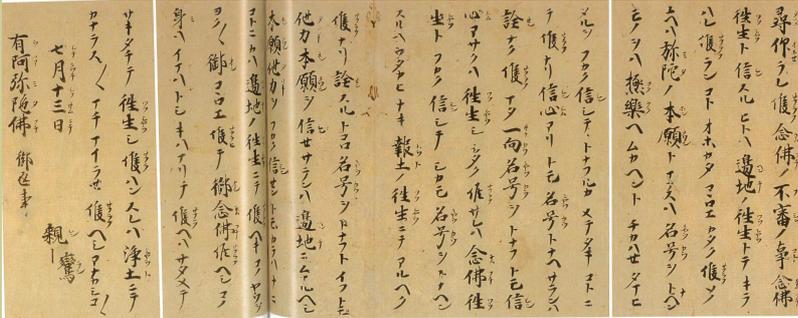
また、生んでから、我が子を受け入れられないケースもあり、医療者側は、強制的に受け入れさせようとするのではなく、温かく見守り、一歩一歩、受け入れてもらえるように心を配ることに努めておられます。

医療が発達しても、全ての生命を助けられないことも現実であります。豊島先生の新生児集中医療室（NICU）では、二四時間、親御さんが、看護師さん、お医者さんが付き添っておられるのですが、抱っこできずに、お別れしなければならぬならないように、細心の注意をはらって親御さんに抱っこできるようにしているそうです。

また退院を勧め、それは「看取る」ためではなく、限りある時間を「一緒に生きる」ことにとめておられます。NICUは、「生命をめぐる話し合い」が多い場所だそうす。そして、「障がいとは」といつも自問自答しておられるとのことす。

このCOVID19の禍中、感染しないようには面会をしないのが常識になっていますが、あきらめず、ご家族が会い触れ合えるように、最善の方途を常に摸索実践されておられることに感嘆するばかりでした。

私は医療従事者ではないから何も出来ないなあと思っていましたら、子ども病院周辺の方が、病院に手指アルコールが足りないことを知り、仕事の合間に、商店・会社を回って備蓄のアルコール缶を分けしてもらい、病院に届けるボランティア活動しておら



親鸞聖人七十五回大遠忌記念 親鸞 親鸞の手紙

浅井 成海氏著（別冊 太陽）平凡社発行）より抜粋

弥陀の本願力

今生ではたらく私の慈悲は、私が起こしている慈悲と思ひ込んでいる間は、自分が亡くなれば、その志はついてしまひ、恩愛の繰り返しなのかと思ひます。

浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもって、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり」ということは、この身が仏に成ることが第一と言うのではなく、称えるその名号「南無阿弥陀仏」が私の意思とは関係なく、阿弥陀さまの慈悲がはたらいっている証拠と味わうことと思ひます。

この私が慈悲を掛けていると思ひている相手を通して実は阿弥陀さまの大慈悲が私を仏にしようとして、この凡愚の私の情（こころ）に「哀れみ、悲しみ、育み、慈しみ、助けたい 仏さまのような」心」を抱かせているのでしよう。

それは、慈悲を掛けていた相手がたとえ、亡くなつたとしても、その方はお浄土に生まれ、仏さまとなつて、阿弥陀さまのご本願に包まれていることを伝えてくださつておられる。そして、自分が亡くなつても仏と成つて還つてきて、阿弥陀さまの大慈悲を伝える。だから、お念仏申すことが、一貫した大慈悲だと仰るのではないでしようか。

尚、阿弥陀さまの大慈悲心と、何か自分を越えた他の力が私の慈悲を後押ししているとか、ご信心を頂いた者の慈悲行とかと混同してはならないと思ひます。

生苦」について

先の豊島勝昭先生のお話を聴きながら、慈悲」

の他にもう一つ仏教で言われる四苦（生老病死）の中の「生苦」ということを考えずにはおられません。した。

「生苦」とは、生きる苦しみ」ではなく、生まれる苦しみ」という意味が定説になっております。私は二〇年ほど前にそのことを知りましたが、それでも自分が生まれるときは全く憶えていませんでしたので、懐疑的でした。

豊島先生からNICUで生まれる赤ちゃんやそのご家族、出産に関わる医療者のお話を聴くと、生まれる時の苦しき」というのは、生まれる本人に自覚がなくても有るのかなあとも思ひました。

それでも、その思ひは客観的にすぎません。志慶眞文雄氏は、やはり長く「生苦」がはっきりしなかつたそうです。

生まれる時、お母さんの狭い産道を通ってくるから？居心地のよい子宮から冷たい世間に無理に押し出されるから？思ひのままに、どの時代、どの国、どの人種、どんな家族、どんな個性なのか等、選べずに生まれるから？「生苦」なのか？

現段階では「エゴ」という業を背負つて生まれることが「生苦」の意味ではないかと仰る。

私は、「生苦」の意味ではないかと仰る。生まれる時の苦しき」と「時」として受け取つていたようです。

他の「老病死」は「老いること」「病むこと」「死ぬこと」と捉えていて、同様に「生まれること」の苦しき」と受け取るべきなのかとも思ひます。

また、「苦」とは「思ひどおりにならないこと」と言われますが、仏教で言われる「苦」は、何も意識されるものだけではなく、無明を無明とわからない、そのことが「苦」とも説かれています。（一切皆苦）

そして、何も「生まれる」とは肉体的な「生」だけを指しているのではないとも思ひます。無垢な子が、いずれ自我にめざめる。それも「生まれる」ではないでしようか。

「誕生」の「誕」には「嘘・偽り」の意味があります。そうすると、五濁増のこの世界に生まれるというのには、「苦」の何ものでもないでしよう。

そうであるからこそ、生まれてくる子を通して、阿弥陀さまの「あなたを必ず仏にします」とのご本願の現われと味わいたいものです。

赤ちゃんは「生む」「産む」ではなく、古来から授かる「預けしめたまふ」と頂いて来たことではないでしようか。

あづけしめたまふ

『歎異抄』第一条には、弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつころのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。」とあります。あづけしめたまふ」とは、古語で、私どもにはまどろっこしく聞こえます。

それで、よく「預からさせていたたく」と解釈し私が主語になり、目上の方から、何か物をお預かりする」という行為を表わしているように錯覚します。が、ここでは、「撰取不捨の利益」を「私」ではなく、「撰取不捨の利益」を「私」に受けさせてくださるのではなく、「利益」を私に受けさせてくださるのではなく、阿弥陀さまのご本願の中に、この私をおさめさせてくださるとなると思ひます。私が救われるということは、私そのままが救いの中におさまる、それがご信心を賜るといふことではないでしようか。

稱讚寺 行事予定

二〇二二年 三月の行事予定

六日 (土) 門信徒の集い 午後二時

七日 (日) 日曜礼拝 午前七時

十四日 (日) 日曜礼拝 午前七時

十六日 (火) のんのん法話会 午後二時

二十二日 (日) 日曜礼拝 午前七時

春季彼岸会法要 午後二時

二十六日 (金) のんのん法話会 午後二時

二十八日 (日) 親鸞聖人を知ろう 午後二時

もんし

聞思 ありのままの

じぶん む あ

自分と向き合う

二〇二二年 心のともしび」三月カレンダーより

2021年 春季彼岸会法要

日時：3月21日 (日) 午後2時～午後3時

日程：14:00 おつとめ (仏説阿弥陀経)

14:40 法話 (稱讚寺住職)

15:00 恩徳讃 (解散)

※この春のお彼岸には間に合いませんでしたが、いつでもどこでも、稱讚寺のご本尊(阿弥陀如来さま)にお会いでき、ご参拝いただけるようになります。スマートフォン/タブレット/パソコンのいずれかをご用意になって、ご自宅でお待ちになってください。

編集後記

一月二十八日から甥の綾 どの二人暮らしが始まりました。引越してきたその夜、引越祝いとして、引き出物カタログから注文していた神戸牛のステーキを料理しました。二人暮らしになると、対面での食事が増えるだろうと、前もって、写真のテーブル用シールドを購入しておきました。甥は、そんなに使うことはないだろうけどは、言っていました。甥は日頃は夕食にはご飯を食べないようになっているようですが、今日はお飯を食べようかなと言ってくれて、元々の食材が良いからでしょうが、私が適当に味付けしたステーキを「うまい、うまい」と言っていて、ご飯も一杯食べてくれました。

食事が終わると、率先して、皿を洗ってくれました。内心、これから毎日三食の用意をしなければならぬかなあと思っていました。翌朝から、私が留守の間に、洗濯をし、それを干して、私の分まできちんとたたんでくれるし、部屋の掃除はしてくれるので、食事も彼は彼で、健康を気遣って、制限しているようです。自分なりの食事をしてくれておりますので、私が毎日用意する必要もありません。彼が、シールドはそんなに使わないだろうと、前に言っていたことが分かりました。

甥と住むようになり、まだ「週間ですが、いい加減な一人暮らしをしてきた自分の身が引き締まるような気がしました。

二十八日は、食事が終わり、甥が後片付けをしてくれて、「思っていたら、明朝の葬儀の準備でもそろそろしようかなあと思った途端、法名紙」が切れていたことを思い出しました。慌てて、同じ組内のお寺さんに電話をして、法名紙を分けてもらうことにしました。外出時間の夜八時ほどに過ぎていました。ご住職は快く分けてくださり、やれやれと思いつつ、帰りの車中、思い出しながら、ありました。やっちゃった」という後悔

しかなかったが、このことは次号にてお話しさせていただきます。

